



←矢切畑では毎年恒例のジャガイモ掘り大会が、地元選出の市議会議員の主催で行われていた。多くの家族連れでにぎわっていた。

→梅雨とは思えない穏やかな日。鏡のようになめらかな江戸川の川面。

肌寒い日が続いた一週間だった。梅雨のさなかとはいえ梅雨らしくシトシトと雨が降ることもない。

それはそれで不満もないのだが農家の人たちにとっては不満なのだろう。これから半年先の収穫時を考えながらネギの植え付けが始まるからだ。

そんな矢切畑とは無関係に矢切の渡しでは「双京構想」で話が盛り上がっていた。

双京構想とは京都市が提唱する天皇家の住まいを京都に移し、東京と京都の二つを都としようという構想だ。

「おもしろい発想だよなあ、南北朝時代みたいだ」

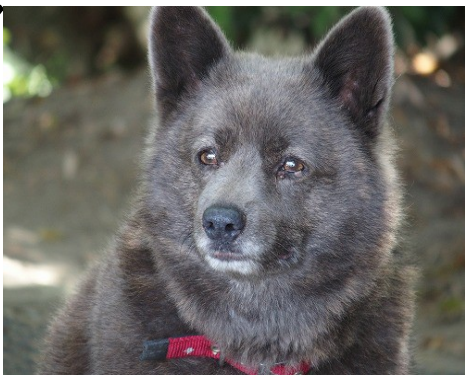
舟頭さんはそういつて、いまから七〇〇年近く前の一三三六年から一三九二年まで続いた二つの天皇家が存在した時代を連想して話はじめた。

あの時代は京都に光明天皇が住み北朝とし、奈良に後醍醐天皇が住み南朝とした。

「そうするとあれかねえ、天皇家にお伺いをするときには、そのたびに京都に行くわけ？」

## 今週のクマ

→クマのすまし顔。こうして見るとけっこうかっこいい。



→カラスの雛がほかの親たちに追われていた。助けてやったが、しばらく飛べなかった。翌日、見に行ったらいなかったのので、無事に飛んでいったのだろうか？



「そういうことになるのかねえ」

そんな中途半端な返答しかできなかつたが舟頭さんは、

「日本の国が二つに分かれるわけよ。東京にも天皇家があり、京都にも天皇家があるというわけ」

「つまり天皇が二人いるというわけ？」

「そういうこと。だから、たとえば新潟県の糸魚川と静岡県の浜名湖あたりを結ぶ中央地溝帯で日本を南北に分けて二人の天皇家がおさめるとか……」

「あるいは関ヶ原でもいいよね。北が東京を首都とし、南は京都を首都にする」

そういうえば小松左京の『日本沈没』という小説がヒットしたころ、日本を二つに分けておさめる漫画が読まれていたことがある。最初に描かれたのが『週間少年チャンピオン』、少し遅れて『ビッグコミックスピリッツ』で連載された。

「しかし、実際にそんなことになったら困るだろうなあ」

「そりゃ困るだろうね。だけど実際に関東と関西とは区別されてるんだよ」

たとえば電気のサイクル、関西と関東とは違う。その違いは暗示なのだろうか。ま、深く考えないことにしよう。